

# とても短い話



## 自分探し

---

自分探しの旅をしている外国人と仲良くなった。

滞在先のホテルに遊びに来いとしつこく誘ってくるので仕方無く行ったら、上機嫌でやっと新しい自分を見つけたのだと言う。

「君だよ！」 「え？」 「僕は君になって人生をやり直す！」

え？え?? で、なんでナイフを振りかざしてるの？

## 本

---

本が好きで、小さい頃からたくさん読んだ。

私に似たのか子供も本が好きになった。

自分が昔読んだ本を読ませたいと思ったが、もう手に入らない物も多い。

実家に取りに行ったら全部捨てられてしまっていた。

自分の中の半分くらいが空っぽになった気がした。

## いつもの角を曲がれば

---

いつもの角を曲がればいつもの...あれ？ いつもの店がない！ 昨日まではあったのになんで？

「地球から連れて来た生物のうち、人間だけが迷路実験で躓くね」

「人間は他の動物よりも生存本能が乏しく、餌が無ければ他を探すのではなく、何故無いのかを考えてしまうようです」

## 残った物は

---

人間が被っているものを一つずつ剥いでいく。

まずは常識、礼儀。最近は元々被って無い人間も多い。

義理、矜持。少し扱いにくくなってきた。

まだまだ剥ぐ...知性、本能...。かなり小さくなってしまった。

最後に人間というラベルを剥いだ。残った物は真っ黒く濁った、悪という名の塊。

## 猫に鈴をつける方法

---

猫に鈴をつける方法がわからず沈黙が続いていた。

若いネズミが長老の前に出て来て言った。

「私に良い考えがあるのですが...」

その言葉に皆が色めき立つ。ですが...若いネズミは言いにくそうに続けた。

「残り 40 字では説明できません」

長老は何か言いかけ、黙って首を振った。

## クリスマスプレゼント

---

クリスマスに何が欲しいかなんて聞かれた事がなかった。

毎年父親が自分勝手な物を買ってきた。

百人一首、人生ゲーム、ジグソーパズル...

文句を言いながらも皆で遊んだ。

今思うと父親は毎年、「家族の時間」というプレゼントをくれていたのかもしれない。

## 奪命

---

多くの命を奪ってきた。

今まで生きていた者が一個の物に変わる瞬間にはいつも、やり切れない気持ちと共にやり場のない怒りが込み上げてくる。

「もういい加減に慣れろ」と言われるが、慣れるもんじゃない。いや、絶対に慣れるわけにはいかない。

この世界に染まらずに立ち続ける為に。



## ラベル

---

結婚したら私のラベルが「佐藤さんの奥さん」だけになった。

早く「課長の奥さん」「ママ」みたいなラベルが欲しいと訴えたが、夫はラベルの数が人間の価値じゃないと言い毎晩喧嘩をした。

ある日夫のラベルに「恐妻家」が増えた。

はっとして見ると私に「鬼嫁」のラベルが。

## 君の好きなもの

---

君が好きだったから、君が好きな物は僕も好きになった。

君が嫌いな物は僕も嫌いになった。

最後に君が僕のことを嫌いだと言ったから、僕は自分のことも嫌いになってしまった。

でも、やっぱり君のことは好きなまま。

今は君の新しい彼のことが、ちょっと気になる…。

## 気になる展開

---

マッチ売りの少女を助けた。

少女は私を洋館に案内し豪華な料理と小さな箱をくれた。

展開が気にはなったが、私は箱を開けた。

煙が立ち上り、白い髭を蓄えた老人になってしまった。

「行きましょう。新しいサンタ」

少女がトナカイに変身し、私を無理矢理ソリに乗せて空に飛び上がった。

## 耳かき

---

妻が珍しく耳掃除をしてあげると言う。

機嫌を損ねたくないで膝に頭を乗せた。

ところが

「通帳の残高。心当たりがあるでしょう？」

という言葉と共に耳の奥に激痛が走った。

「動かないで。ギャンブルかしら？ 誰かに貢いだのかしら？ 耳かきで脳みそって掬えるのかなー」

や、やめてー。

## 近づく手

---

手が近付いてくる。

この手の意味は様々だ。

叩こうとするのか。

追い払われるのか。

撫でられるのか。

捕まえられるのか。

手がすぐそばに来るまでわからない。

逃げるのか。受け入れるのか。決断するタイミングを間違えないことが大事。

いつでも引っ掻けるように右前肢は浮かせておく。

## 仕事と私

---

「仕事と私どっちが大事」「君」二人は結婚した。

数年後「子供と俺どっちが大切」「稼がない夫より子供よ」「仕事より君を選んだからだ」離婚の危機。

「パパとママどっちと暮らす」子供は答えた。

「短絡的な二者択一をした結果がこれ。選べないものはある。反省した方がいいよ」

## 俺の部屋

---

大掃除を機に俺専用の部屋を作った。

妻は嫌がったが、家のローン払ってんのは俺だと言ったらムツとして黙った。

翌日帰ったら家がガランとしている。

床に妻の書き置きが。

「貴方の物は貴方の部屋に片付けておきました」

慌てて部屋を見たら、家中の家具が積み上げられていた。

## 執着

---

とろりと重く湿った空気、足音も吸い込まれそうな暗闇の中。

捜し求めていた君を、君の残骸を見つけた。

あんなに執着していたのに、虫がたかっているのを見たら触れるのも躊躇われる。

靴先で探ると白い塊が転がった。

それは君の肌にも似た滑らかで白い、縋るような君の指先の骨。



## ショウガツ

---

ずっと座って待ってる。

いつも頭を撫でてくれる人。

カイシャに行く途中来てくれるんだ。

おいしい物も食べさせてくれる。

オカアサンが猫嫌いだから私を飼えないんだって。

寒いな。お腹が空いた。いつ来るのかな。

ショウガツが終わったら？ もう来ないの？ 街の感じもいつもと違う。

## 電車で彼と

---

電車で彼と並んで座っていた。

正面で熟睡してる女性のスカートの中が...見えそうって言うか見えてるかも。

起こそうか迷ったが結局そのまま降りてしまった。

教えてあげればよかったかなと彼に言ったら

「教えてくれればよかったのに」と。

誰によ！

「損した気分になるじゃん」

なんでよ！！

## 猫の気持ち

---

動物の気持ちを機械音声で表す装置が発明された。表現は機械が大幅に補足する。

まずは猫バージョンから。評判はまずまず。

ところが動物病院では「殺されるー」「助けて！」の声に飼い主が取り乱し、更にはワクチンや避妊、去勢手術の意義を猫が納得するわけもなく、混乱を極めた。

## 猫の気持ち、その後

---

装置を付けたまま猫を外に出すと、飼い主の秘密を誰彼構わず話してしまうことがわかった。

装置は販売中止になった。

だがその後改良された超小型タイプは極秘に使われている。

獣医の使う聴診器に形を変えて。

彼等が診察台の動物に「今日はどうしたのかな？」と問うのはその為である。

## 鏡

---

妹の形見の三面鏡は私がもらうことにした。

鏡を開くと表面が白く曇っていた。

あんなに綺麗だった妹が、最後には自分を見ることすらしなかったというのか。

磨こうとタオルを手にして気が付く。

鏡面に妹の手の跡があった。

掴もうと思ってももうその手はない。

タオルを握りしめて泣いた。

## 双子

---

彼女と私は一卵性の双子。

見た目はそっくりなのに、あの人は私ではなく彼女を選んだ。

彼女が言う。

「彼は目に見えない違いで私を選んだのよ」

もし私達が一人で生まれてきたら、あの人は「私」も一緒に愛してくれた？

それとも中に存在する「私」を嫌って結局避けられてしまうの？

## オセロゲーム

---

オセロゲーム。

懸命に白を増やす。

盤面はほぼ白だったのに、1つの黒い石がパタパタと黒く変えていく。

人間関係も一緒。あっという間にひっくり返ってしまう。

好意から嫌悪に。

また巻き返せるのか？ それともゲーム自体をやり直す？

ほぼ黒くなった盤面を見て迷っている。

## 夢の中で

---

夢の中で私は小さな部屋にいた。  
隣で女の子が泣いている。ずっと。  
どうしたらいいかわからなかったから、黙っていた。  
女の子はしゃくり上げながら話し出した。  
「別れたくない、て、言えばよか、た」  
もう遅いよ。切れ切れの言葉に答える。  
そして朝。  
私はまた泣きながら目を覚ます。



## ウサギと亀

---

「君がゴールを決めていいよ」

と今回は体調万全のウサギ。

「じゃあ、ここに」

と亀が旗を立てたのは、ウサギのいる所から1mほど離れた場所。

首を傾げて不思議がるウサギに向かって、亀はこう言った。

「地球を約1周ね。僕は長生きだし海も泳げるけど、君は大丈夫？」

## 星と花火

---

今までに見た事がない数の星があった。

友達はさっき声をかけてきた人達と花火をしている。

私は星空から目を離すことができず、一人で上を見ていた。

後で友達から彼等に失礼だったと怒られたけど、

あの時の私には誰かが見せてくれる花火より、見上げる星空の方がずっと魅力的だった。

## 君の微笑み

---

愛してるなんて言う勇氣は僕にはない。

なのに君が、他の誰かのものにならないことを必死に祈ってる。

そんな僕だけど、極たまに君と視線が絡む時がある。

ほんの一瞬。

確かに僕の存在を認めてくれる。

その時浮かべる微かな笑みに、僕は希望を持っていいのかい？

## アンパン

---

娘「アンパンってお店によって味が違うよね」

母「そう?」

娘「単に中身の餡の差じゃないよね」

母「餡とパンが互いを引き立たせてるってこと?」

娘「そう。中身が如何に良くても、外側が合っていないと旨くないってこと。で、服買ってくるからお金頂戴」

## 冷蔵庫の中には

---

最近いろんな物を冷蔵庫で見つける。

タバコ、財布、眼鏡、携帯。

うっかり冷蔵庫に入れてしまうらしい。

歳のせいかな。それともストレスのせいかしら。

今日はお義母さんが静かだからゆっくりできてるけど。

さ、お昼の用意をしないと。

冷蔵庫を開けたら、お義母さんを見つけた。

## 運命の人

---

私には「運命の人」がわかる能力がある。

今までに何度も「運命の人」に出会った。

初恋の人、結婚詐欺師、お金を持ち逃げされたり、パワハラ上司、ストーカー…。

そう。皆、私の人生を変えた人達。

次は「運命の人」が私を幸せにしてくれるのかどうか、わかる能力が欲しいところだ。

## ボタン

---

溜息ついて歩いてたら知らないおばさんに声をかけられた。

「ボタンを掛け違えてる」

そう言うと私の背中でなにやらごそごそ。

ボタン？今日の服にボタンなんて付いてたっけ？

「せっかく良いものを持ってるんだから。ちゃんとしないとね」

ぼんぼん。

気がつくともういなかった。

でも。

なんとなく気持ちが軽くなった。

## 赤頭巾

---

未来未来、赤い頭巾を被った女の子が、森の中の祖母の家に入っていました。

様子を見ていた猟師は

「可哀相だが、増えすぎた人間よりも絶滅寸前の狼が大切だ。狼にも赤い頭巾の子以外は狙わないようによく言い聞かせないと。ばあさんなんか喰ってお腹を壊したらどうするんだ」と呟いた。



## 隣の席

---

彼が私の隣に座った。

わ。動悸で心臓が壊れそう。息も上手くできない。

どうしよう。スーハー深呼吸なんかしてたら変な奴だと思われるかも。

手まで震えてきた。もうだめ。席を変えよう。

彼をそっと眺めていられる後ろの席。

その時彼が言った。

「教科書見せて」

私、死んじゃうかも。

## 時を早送りして

---

全てを拒絶したくて。

抱えた膝に顔を擦り付けて、目を堅く閉じ耳を塞いだ。

体の真ん中で渦巻く感情が冷たく固まり、どんどん重くなる。

吐き出せれば楽になるのに、どうしたらそうできるのかわからない。

このまま時を早送りできたらいいのに。

砂塵になった私を風が吹き飛ばすまで。

## Thank you

---

隣の席に座った彼が教科書を見せて欲しいと言ってきた。

私は頷くのがやっと。

この3年間ずっと遠くから見ていた。

今までで一番近い距離が今日の教科書見開き分。

話をするこゝもなかつたけど大好きだった。

彼が私の教科書に書き込んだ Thank you の文字。

ずっと忘れない。

## 一番星、みつけた

---

どんどん暗くなる道をぷらぷら歩く。

「一番星見つけた」「二番星見つけた」

二人で歩くから怖くないよね。

三、四と数えていって、もうどれを数えたのか数えてないのかわからないくらいたくさんの星が姿を現した頃に家に着く。

また明日ねって、もう顔も覚えてない友達に手を振る。

## 父の退職

---

父からの久しぶりのメールは退職の報告だった。

理由も何にも書かれていない。

一体何がと心配になったが、今までもやりたい放題してきた父だから、私もあえて理由は聞かずにおこうと決めた。

母が納得しているならそれでいい。

「暇になるんだから遊びにきてよ」と返信して携帯を閉じた。

## シミュレーション

---

どう行動すればいいのか迷った時に、それぞれの選択結果をシミュレートしてくれる機械が発明された。自分の行動を決められない人達は常に機械を持ち歩き、最良と思われる選択をしていく。ただ選択されなかった方のシミュレーションが正しいのかどうかは、誰も証明できないのだった。

## どっち？

---

男かな？ 女かな？

人の性別を見極めるには色んな方法がある。

まず外見、もしくは行動を注意深く観察する。

それでわからなければ裸を見せてもらうとか。

それでもわからなければ遺伝子検査？

でもまずは一番無難なやり方で。

「かわいい赤ちゃんですね。女の子ですか？」

## 誰のための

---

母は裁縫が好きだ。何枚も服を作ってくれた。

小さい頃はブカブカだったけど、そのうちぴったりの服を作ってくれるようになった。

でも私が成長しても母の作る服は小さいまま。

ついに着る事ができなくなった。

お母さん。私こんなに大きくなったんだよ。

誰のための服を作ってるの？



## 貴方の話

---

本ばかり読んでいる貴方に、この本はどんな話って聞くと、自分で読めって言いながらもちょうと教えてくれる。

内容を知っていても、貴方の解釈を交えた話は別の物語を聞いているようでとっても楽しい。

だから本を読むのは構わないけど。

夢中になりすぎて私がいること忘れないでね。

## ため息

---

はあ。

「ため息つくとき幸せが逃げちゃうんだってよ」

友達の声。

いいの。私の欲しかった幸せは逃げちゃったから。

あの人結婚しちゃうんだって。

「いっばいため息ついたからだよ」

そんな事言わないで慰めてよ。

「はあ」

友達がため息をついた。

「今逃がした私の幸せあげるよ」

## 妖精の羽

---

片方の羽がもげた妖精を拾った。

やっと元気になった妖精は楽しそうに暮らしていたが、やがて片方の羽だけで飛ぶ練習を始めた。

理由を聞くと自分の国に帰りたいと涙をこぼした。

ここで僕と暮らすのも楽しいだろ？ 妖精を撫でてやる。

楽しいけど帰りたいの。

僕は妖精の残った羽をもぎ取った。

## 湖の女神

---

湖。彼が沈んでいく。

と、女神が表れた。

「あなたが落としたのは…」

この展開は! 絶対に間違えられない。

「金のやつ」と慌てて叫ぶ。

「ではこれを」

金と銀の誰かの遺体と普通の彼の遺体。

女神が言った。

「皆がここに捨てるから湖底が遺体だらけ。サービスするから持ってって」

## 電話

---

繋がらない電話は嫌い。

いつまで待てばいいのかわからないから。

あと1回鳴らせば出るのかも。何度もかけ直すとしつこいと思われるかも。

諦めて受話器を置いたら、あなたは私のいる世界から消えてしまった。

私はいつまで待てばよかったんだろう。

鳴り続ける呼出し音を聞きながら。

## 味覚

---

旦那が私の料理にあまりにもひどい文句を言うので、一服盛ることにした。

味覚記憶喪失薬。

これで旦那の味覚に関する記憶はリセットされる。

さあ、あなた。お義母様の味は忘れて。二人で美味しい物を覚えていきましょう。

まずはこれを。

これがミルクの味よ。美味しいでしょ。

## 愛を感じる時

---

「人間は愛される為に生まれてくるんだって」彼女が力説する。

「飛ぶ鳥の姿が綺麗なのが飛ぶ為に生まれたからだとすると、私が一番綺麗になれるのは貴方の愛を感じる時」

僕の？

思わず彼女を抱きしめ...ようとした手を軽く払われた。

「これ」

彼女の手には結婚情報誌。

「ね、結婚しよ」

## 実を結ぶには

---

熱心に木の手入れをしている青年がいた。

何年も世話をしてるのになかなか実が生らない。いつも途中で腐って落ちている。

ある日青年に「精が出ますね」と声をかけると実が生った。

「やっと実りました。ありがとう」

「何の実ですか？」

「努力の実です。人に認められないと実らないんですよ」



## 告白

---

伝えたいことはたったひとつ。

なのに上手くいかない。

バレンタインこそと準備をした。

でも。

「あのね」と話しかけた後、毎回話題が全く違う方向に向かうのは、私の気持ちに気付いたあなたがわざとそうしてるのだと思い当たった。

用意したチョコは出番のないままその役目を終えた。

## 私の...

---

朝靄に煙る森の小路を抜け沢に下りる。

豊かに流れる澄んだ川面。

沢を渡る風に揺れる葉ずれの音と、それに重なる川の水音に耳を傾け深く息を吸い込んだ。

そうやって人間が勝手に与えた名前、作り出した文字を使って、私は私のために物語を紡ぐ。

それはとても自由な私だけの世界だ。

## そこにあるのに見えないもの

---

「昔はここから富士山が見えたの」

母は窓を開けた。

「いろんな物が邪魔して見えなくなったけど、それはちゃんとそこにあるのよ。ただ見えないだけ。だから...」

沈黙の後、母は「元気でやるのよ」とだけ言った。

父と衝突し、家を出てしたい事をする決めた私に、最後まで「いつでもここに帰ってきていい」とは言わなかった。

## どんな夢

---

疲れた。

仕事が終わりに後片付けを始める。

最近すごく働いてる気がする。夜寝てもすぐ朝を迎える感じで、このところ夢も見ない。

...いや、夢は見た気がする。どんな夢だっけ。...そうだ、仕事の夢だ。それでこんなに疲れてるのか。

わ！なんだ目覚ましか。え、今のも夢？これから仕事？

## 生き方

---

「君の世界は小さい。君の全ては両手に収まってしまう。僕はもっといろんな物を集める。経験は財産になる」

「私の両手には私に必要な物が全て収まっているわ。人生に必要な物はそんなにたくさんないのよ」  
双方の言い分間違いがあるとすれば、他人の生き方を否定した所である。

## 大きな手

---

怒られ放り出された。暗くて怖い。玄関を叩いて泣いているのは3歳の私。

後ろから手が伸びてノブが回される。大きな手。

驚く母に「お子さん、ドアノブに手が届かなかったみたいで」と言い訳しつつ私の背中をそっと押した。

昔はそんな大きな手を持つ人が今よりちょっとだけ多くいた。

## あやつりの

---

右腕が上がらなくなった。

症状を伝えると医師は「糸が切れたんでしょう」と言う。

そして私に近付くと、わぁっと言って尻餅をついた。

「糸が無い！」そう言いながら後ずさる医師の上には何本もの糸がキラキラしている。

きゃー。皆逃げ出した。

え？え？待って！糸って何！私も怖いんだけど！

## おすそ分け

---

「どうぞ」

彼の前に一生懸命作ったチョコケーキを置いた。おいしいって言ってくれるかな。

彼はフォークに一口分を取り...私の方に差し出した。

「僕だけ食べるのは申し訳ないから」

え！と開けた口にケーキが入ってくる。

「おいしい？」彼が笑う。

「もごもご (それは私の言う言葉)」



## 女らしさ、男らしさ、人間らしさ

---

女である事が嫌になったので、女らしさを捨てる事にした。

少しでも女らしさを連想させるものはどんどん捨てる。

ただ残念ながら男らしさを加える事はできなかった。

最後にはシンプルな人間らしさが残るはずが、どう間違えたのか「どうやら人間らしい」と言われる様になった。

## 煮干し

---

動物病院で。

「日本だけですよ。猫に煮干し」受付の女の子が言う。

「うん。塩分や不飽和脂肪酸が気になるから与え過ぎないように飼い主に言わないと」と言いつつ愛猫に煮干しをあげる。

「与え過ぎないんですよ。先生」

わかってるけど喜ぶんだよね。煮干しって。

## 匂いを辿って

---

初めて入った彼の部屋。

なんだろう、この香り。よく知ってる物の様な気がする。

彼が席を外した隙にいろいろ調べてみる。枕に手をかけた時、彼に見つかった。

「気が付いちゃったんだね。いろんな物を試したけど、それじゃなきゃ眠れないんだ」

枕の中身は...煮干し。

## 強く

---

寂しい。誰もいない。

誰か!側に来て!

大声でなくても誰も来てくれなかった。

ないてないて疲れてなき止んだ頃に声がした。

「ポチ、無駄吠えはダメなんだよ。鳴かなければ皆相手してくれるからね」

優しい手が頭を撫でる。

そうか、ないちゃダメなんだ。もうなかない、僕は強くなる!

## 窓際の彼

---

彼は窓際に静かに佇んでいる。

充電が切れる前にそうして欲しいと願ったから。

軽くウェーブした髪が月明かりに照らされ、伏し目がちの目も、微かに浮かんだ笑みも、とても綺麗だ。

あの件以来多くの人が死んだ。

私の命もあと僅か。

でもこうして彼を見ていれば私は穏やかに逝く事ができる。

## 彼と本屋で待ち合わせ

---

彼と本屋で待ち合わせ。

彼を待って店内をうろつく。最近 TL 上で話題になっている本があった。

買ってみようかな。と、彼からメール。

見ると私の「積読専用本棚」の画像が。「早く読んでー」だって。まったくもう、いつ撮ったのよこの写真。いいわ。本は買わない。で、どこにいるの？

## いってらっしゃい

---

「いってらっしゃい」

遠くなる後ろ姿。

子供が成長するに従って「いってらっしゃい」から「お帰りなさい」までの時間がどんどん長くなった。

そしていつか帰って来なくなる。

もう「お帰りなさい」じゃなくて「いらっしゃい」と言わないとだめなのね。

結婚おめでとう。幸せになるのよ。

## 角度

---

いつも一緒に歩いていたのに。

生き方の角度が少し違ったせいで、いつの間にか君が遠くにいってしまった。

僕が生き方を曲げればよかったのか。

でも地球は丸いから。

僕達が地球上を重力に縛られて歩いている限り、いつかまた君と会うことができるかもしれない。

だから僕は歩き続ける。



## 傷

---

心に付いた傷は涙で癒すらしい。

彼との別れも、彼女に投げつけられた言葉も。

ひたすら泣けば洗い流され、いつしかその痕すらもなくなり忘れられるのだろうか。

そんな風になるのなら私は泣かない。この痛みを忘れない。

何もかも許して、ただにこにこ笑っていた自分にはもう戻らない。

## 強くなるために

---

強くなりたくて鋭い爪をつけ、全身を分厚い皮膚で覆う。

心が傷付かないよう感情も捨てた。もう悲しみも喜びも何も感じない。

化け物と呼ばれてもわからない。ただただ呼吸するため、食べるため、寝るためだけに生きてゆく。

最初に求めた強さがどんなものだったかももう思い出せない。

## 優しい貴方

---

携帯を開いてすぐ閉じた。

もう頼らないって決めたのに、こんな日にはつい電話をしてしまいそうになる。

「大丈夫だよ」って言って欲しくなる。

貴方は優しいから誰にでもそう言うの。わかっているけど期待してしまう。

電話をするともっと辛くなってしまうから、もう電話はしないの。

## 仕切り

---

「所長、地球人のストレスが限界です」

人間関係で？ 夢の生産率が下がるね。こないだクニで仕切らなかった？

「クニやイエで仕切っても効果なしです」

じゃあ個別に仕切ろう。確か地球の鶏がそんな感じだった。獺の食べる夢が無くなったら困るしね。

養獺場の宇宙人が言った。

## 本当に頑張ったのは

---

地味な私に彼ができた。

「僕が君を変えてあげる」

最愛の彼はお気に入りのモデルを指した。

「こんな感じになって」

モデルと同じ服を買い、美容院、エステ、ジムに通い...

これは貴方のおかげ？ 貴方は雑誌を指差しただけ。

でも私は変わったわ。

最愛だった彼に別れを告げた。

## 約束

---

結婚しよう。彼女に告げた。

すると彼女は「幾つか約束して」と言う。

内容は浮気はしないなど当然の事ばかりだったが、最後の「私よりも先に死なないで」には苦笑い。

僕にはどうしようもないよ。

すると彼女は「でも努力する事はできるでしょ。まずは煙草を 3mg のに変えてね」と言って笑った。

## 母子

---

娘が部屋に閉じこもった。

昔の私と同じ事で悩んでいたから、ついあれこれと意見を押し付けたせいで。

娘の気持ちがわかっているつもりだった。

本当にわかっていたのは当時の私の気持ちで、今悩んでいる娘の気持ちじゃないのに。

ふと、私も昔、母と同じような喧嘩をした事を思い出した。

## 秘伝のスープ

---

村には祭の日に巫女が作り、皆を幸せにする伝統のスープがある。

そのレシピを私が継ぐ事になった。

先代は木ベラを手に「これで混ぜるだけ」と。

マタタビ製の木ベラ？猫族の私は匂いでおかしくなりそうだ。

「巫女が一番苦労するのはこれの誘惑に負けずにスープを作ることにゃ」



## 続きは明日

---

入院中の楽しみはあの子と色々な話を作る事。

数多のチューブに繋がれたあの子も物語を紡ぐ時は楽しそうだった。

病室は私達次第で海底や宇宙になった。

どの話にも終わりはない。いつも「続きは明日」で手を振った。

昨日の続きが今日、今日の続きは明日といつまでも続くと思っていた。

## 様々な経験

---

「今までにいろんな経験をしてきたわ。初恋もしたし、失恋もした。飲酒も喫煙も受験も浪人も就職も結婚、出産、育児も経験した」

妻は私に詰め寄った。

「不倫と離婚の経験はまだなんだけど」

探偵社の名前が書かれた報告書が目の前に置かれた。

「それはあなたが協力してくれたようね」

## 父の想い

---

母とはよく話した。でも内容はほぼ父への不満だった。

プライドが高く人の気持ちがわからない母。

入院中も見舞いに来る父に文句ばかり言っていた。

自分が大切にされている事がわかっていないようだった。

今、煙になって昇っていく母は、号泣する父を見て満足しているのだろうか。

## 春の目覚め

---

春はいつもすっきり起きる事ができない。  
冬が起こしても二度寝三度寝は当たり前。  
その度に世界は暖かくなったり寒くなったり。  
「いい加減にして」  
冬の声に春は寝ぼけて言う。  
「桜が咲いたら起きるから」  
「あなたが起きなきゃ咲くわけないでしょ」  
冬がキレ、季節はずれの雪が降る。

## 理由

---

たぶん、理由っていうのは後から考えるんだ。

「どうして私のこと好きになったの?」とか「私のどこが好き?」って聞かれてから初めて。

僕は彼女の質問に答えるために、自分の心の変化を慌てて反芻している。

この衝動に理由を与えるために。

## どこに行きたい？

---

「どこにでも行けるとしたらどこに行きたい？ 宇宙の果て？ 過去？ 私はね。ちょっとだけ先の未来を見てみたいんだ。例えば 20 年後に、自分が誰と暮らしてるのか気になるし。」

君が言った。

僕は君の中に入って、君が僕をどう思ってるのか知りたいよ。

結婚式前日にそんな事を言うなんて。

## 生まれ変わる前には

---

生まれ変わりを待つ命は、順番が来るまで天使の仕事を手伝います。

星を磨いたり、海底を掃除したり。

星が好きな人は生まれる前に星を磨いていたのかもしれませんが。海が好きなら海の掃除を…。

「浮気したわね！」あ、叩かれてる。

実はこの男性はキューピッドの矢を担いでいました。

## 小さな世界

---

僕の彼女の世界はお伽話のようにふわふわとしていて、飴細工のように薄くて脆い。

その中で、僕から見ればただの石ころ同然の夢のかけらを嬉しそうに繋いでいる。

ちょっとした事で壊れてしまいそうなその世界を必死に護っているのは僕なのに、彼女はそんな事もどうでもいいみたいだ。



## 双子だもの

---

光速に近い速度を出せる宇宙船が発明された。

その初航海では「双子のパラドックス」実験も計画され、多くの一卵性双生児が集められた。

だが会場は大騒ぎ。

説明を聞いた双子が全員宇宙船に乗る方を希望した。

自分より若い姿の相方を、地球で迎えたいと思う者は誰もいなかったのだ。

## どんな人なら

---

芸能人って若い人と結婚できていいなと言ったら妻が絡んできた。

「若い人と結婚したかったわけ?」

そ、そんな事ないです。

「じゃあ料理の上手い人と?」

いいえ。

「掃除をちゃんとする人と...」

ん?! 掃除はしてよ。

「えーっ」

えーって。そんな手で言質を取ろうとするなよ。

まだ。ずっと。

---

テレビの上。タンスの上。お気に入りだったクッション。シーツ。押し入れの中。久しぶりに出した服。

我が家で一番日当たりの良い部屋。

探してももうどこにもいないのに。

時々ひょっこりと現れる抜け落ちた毛が、悪戯っぽく「まだ覚えてる?」と問いかける。

もちろん。忘れないよ。

## 笑顔の先には

---

昔からカメラに向かって笑うのが苦手だったから、どの写真も見事に仏頂面。

それもまた懐かしい。

アルバムをめくると不器用に笑っている写真。

不思議に思って裏を見ると「林くんから」と書いてある。

つつられてしまう人懐こい笑顔を思い出した。

そうか。私、彼が好きだったんだ。

## 同じことを同じように

---

「綺麗な夕焼けだよ」あの時と同じ場所、同じ時刻。

でも隣にいるのは貴方じゃない。

「寒いから窓閉めてよ」って返事に、この人も違うと確信した。

自分と同じ様に物事を感じる貴方を、大切だと思えなかったあの時の私。

何人にも同じ事を言い続けるのも虚しいから、いっそのこと貴方を探しに行こうかな。

## ハイタッチ

---

12年続けた登校時の習慣。ハイタッチ。

喧嘩して膨れっ面で行こうとする娘も、「はい」と手を挙げるとしゅしゅタッチ。

これのお陰で喧嘩も長引かなかったのかもね。

ごめんって言わなくても触れた手で気持ちが伝わる。

今日は卒業式。

春から一人暮らしを始める娘と最後のハイタッチ！

## 幸せな人生

---

男は悪魔に「幸せな人生」を願った。

それからいろんな所へ行き友達を作る。

友達が悩むと一緒に悩む。

友達の友達が悲しむと一緒に悲しむ。

悪魔はその度に男の悩みの種になっている友達の悩みを、友達の友達の悲しみを取り除いてやる事になった。

男は生涯、友達を作る旅を続けた。

## 笑顔で

---

いつも笑っているから。

「やっと繋がった」

電話のあなたの声がいつもと同じだったから。

「きっともう少しで帰れるよ」

後ろは騒然としているけど、頭に浮かぶあなたの顔はやっぱり笑顔で。

いろいろ考えると泣きそうになるけど私も笑顔で答える。

「待ってるから」



## 節電

---

夫には愛人がいる。名前はテレビ子さんだ。

夫はどんな時も彼女の誘惑には勝てない。睡眠時間を削って向き合い、休日は一日中見つめ合っている。だがそんな二人を引き裂くものが現れた。

節電だ。

日頃の鬱憤を晴らすチャンス。

私は嫌がる夫の目の前で容赦なくコンセントを引き抜いた。

いつでも。いつか。

---

子供が家を飛び出した。

「あんな言い方して。いつでも帰って来いと言ってあげればよかったのに」

妻が文句を言う。

いいんだ。あいつは転んだら帰って来いと言った自転車には今だって乗れないが、できるまで帰って来る  
など言った逆上がりはすぐできた。

いつか必ず成功して戻って来る。

嘘

---

危険だけど大事な仕事なのはわかってる。

でももし...「行かないでって言ったら？」

彼は私をそっと抱きしめた。

「君がそう言うなら行かないよ」

嘘。そんな言葉で引き止められないのは知ってる。辛いのは彼の方。だから...

「無事に帰るって言って」

その言葉に縋り、待っているから。

## 不思議なカメラ

---

ピント調節で被写体を善人や悪人に変えられるカメラを手に入れた。

彼のピントを善人に合わせてシャッターを押す。

穏やかになると思ったが怒りっぽくなった。どんなに小さな過ちも見過ごせないらしい。

悪人にしたら、ニヤニヤしながら考え事をするようになった。

もう元に戻したい。

不思議なカメラで変わった彼を元に戻したいが、どこにピントを合わせたらいいのかわからない。

慌てて聞くとカメラ屋さんは言った。

「そのカメラは自分が被写体のどこにピントを合わせて見るか決めるもの。彼は変わらず、彼を見る貴女の目が変わったのさ。色んな面が見えただろ？」

## 何も言えずに

---

大丈夫?って聞くとあなたはとびきりの笑顔で「大丈夫だよ」って答える。

全然そうは見えないのに。

そうすると私はそれ以上何も言えなくなる。

何かを言えば言うほどあなたを追い詰めてしまいそうで。

だから私はバカみたいに黙ってここにいる。

あなたの中の雨が止むまでただ傍にいる。

## 雨宿り

---

雨が降ったら無理して歩かないで雨宿りでもどう？一緒に話でもしようよ。

大丈夫。扉はいつも開けてあるから。

止まない雨はないけど、雨が降るのも当たり前だもん。

そうして雨が止んだらいつだって好きな時にふらりと出て、歩いて行けばいいんじゃない？

雨が降ったらまたおいで。

## 身にまとうもの

---

彼が香水をくれた。

「妻にも渡した。これで妻を抱く時に君を感じられる」

別の意味もあるでしょ？ 渡された瓶をベッドに投げた。液体が零れて香が広がる。

そのまま部屋を出た。

自分の身に纏うものは自分で決める。

不倫の噂も友達の白い目も覚悟して纏ってきたの。

でももうこれで...



## 人の心は

---

人の心は瓶に入った水の様な物だと思う。

気分次第で透明になったり、黒く濁ったりする。

でもそこに言葉の雫が落ちると、時として化学反応のような劇的な変化が起きるかも。

だから僕は彼女に言うんだ。「好きだ」って。

いつか彼女の固まった心が僕の「好きだ」色の水になるまで何度も。

## エイプリルフール

---

旦那から「懐かしい友人を連れて帰る」とメール。

慌てて家を片付けた。

やっと終わった頃、旦那が一人で帰宅。

片付いたねと嬉しそう。まさか四月馬鹿？

「嘘じゃない」

手には私が昔あげたぬいぐるみ。

「ずっと会社にあったから」

これが懐かしい友人？ 満足げな旦那にぶつけてやった。

四月一日

---

ずっと変わらないものなんてないから。私が言った事はいつか嘘になってしまう。

口を閉ざせば嘘にはならないけど、それじゃ何も伝わらない。

結局人は嘘をつき続けて生きるしかない。

そんな息苦しさを楽しさに変えてくれたのが貴方でした。

ありがとう。また会おうね! 四月一日くん!

## 間違い電話

---

引っ越しをしたら、間違い電話がよくかかってくるようになった。

〇〇さんのお宅ですか？ 病院ですか？ 役所ですか？ 消防署ですか？

あまりにも多いので番号を変えたが効果はない。

ところが何故か、電話を新しくしたらピタリとおさまった。

鳴らない電話に、今度は少し寂しくなる。

## 花びらと君

---

家の前の桜が花びらを降らせている。

今日は風も強い。

「午後は雨みたいだよ」

僕がそう言うと君は慌てた。

「降る前に掃いておかないと掃除が大変」

箒で花びらを集め始めた。無理じゃないかな。ほら風に邪魔された。そんなにムキにならないで。

桜と戯れる君を見てるのも楽しいけどね。

## 桜の木

---

幼い頃から私の成長を祝うように咲いていた桜。

今年はまだ蕾のまま。

あなたも彼の事、反対なの？ 桜に問う。

春の夜はまだ寒く、触れた幹も冷たい。

お願い。今夜彼と家を出るの。最後にもう一度…。

ふ、と頬に何か触れた気がした。

見上げるとそこに、闇をうっすらと灯す桜の花が1つ。

## 季節によって

---

「春はいいな。桜が降るように散るのは美しいね」と夏が言うと

「秋は紅葉が。ひらひらと落ちる葉も素敵でしょ」と秋。

冬は「冬は雪が。音もなく降る雪は綺麗だよ」と言う。

春が「夏は何がある?」と尋ねた。

夏は散々考え「夏に降るのは...雷雨?」

それは迷惑なだけだと怒られた。

過去の自分に手紙が出せる「タイムポスト」が発明された。

未来へは送れず宛先は過去の自分だけ。

俺は過去の自分にロトくじの当選番号を送ったが、変化はなかった。

皆が同じ事をしたので当たりが増え、配当金が激減したのだ。

じゃあ、何を送れば...

未来の自分から手紙がきた。「地道に働け」



守と正の間で悩んでいると未来の私から手紙がきた。

「正と結婚して」

正との生活は最悪だった。過去の私に守と結婚するよう伝えよう。

でも。

未来の私は守が嫌で正を薦めたのかもしれない…。

私は書きかけの手紙を破り捨てた。

気が付くと独り身だった。

でもきっとこれが、私が選択した本当の未来。

## 気付いてくれる？

---

後輩の部屋に集まって、皆で騒いでいた。

私の大好きなお菓子があったので密かに喜んでいると、

「先輩がそのお菓子好きだから用意したんですよ」と後輩。

「えっ、私の好み知ってるんだ」とドキッとした。

でも。

私の好みには気付いても、私の気持ちには気付いてもらえないんだよね。

## 選挙？

---

公園で居眠りしていると声が聞こえた。

「もっとやると思って任せてきたのに、どんどん酷くなるよね」

「私達の代表なんだから、もっとしっかりしてもらわないと」

「もう人間に票は入れない」

はっとして周りを見ると小動物が逃げる気配。

人間は次の選挙で落選の危機にあるらしい。

## 伝えにくい言葉

---

どんなに言葉を繋いでも、一番大事な部分は君に伝えにくくて。  
微妙な空気の中、ただ僕の言葉だけがずるずると滑って落ちる。

「で、何が言いたいの？」

棘のある言葉が僕を突き刺す。

僕はただ君の事が好きで、君と話をしたかっただけなんだ。

でも、それを言葉にしたら君は困るだろう？

## 成長すると

---

パパに会いたくて起きてたのに、会えた途端満足して寝てしまう。

そんな息子を優しく見つめ、早く夜更かしてできる年齢にならないかなと呑気なパパ。

「もっと早く出て来れないの？」

「無理。幽霊は丑三つ時と決まってる」

息子が成長すると正体に気付き嫌われる、とは考えないのかな？

## 秘密の...

---

「ルシフェラーゼは蛍の持つ酵素。細胞の ATP と反応して光る。見るか？」

先生は研究室を暗くした。

私が培養した細胞、仮そめの命との反応でもその光は美しかった。

輝きは一瞬。

暗闇で「命の光、綺麗だろ」

その声の近さに鳴った鼓動が嬉しげなのは私だけの秘密。

彼の。私の。

---

「お前もそれが好きなのか！俺達本当に気が合うなあ」

楽しそうに彼が笑う。

私はポケットの中の手帳にそっと触れた。

その笑顔を私のものにするために、数年かけて彼の事を調べあげた。

この手帳に書いてあるのは彼の秘密。

そして、手帳の存在は私だけの秘密。

## 君が望んだ嘘

---

そんな事言っていないと何度言っても、君は聞き入れなかった。

泣きそうな顔で「絶対に言った」と繰り返すばかり。

ふと、言ったか言わないかではなく、僕がそう言った方が君に都合がいいのだと気付く。

だから僕は君の望む通りの嘘をついた。

君はほっと息をついて僕にさよならを告げた。



まるで...

---

思い出したくない記憶は、ちょっとした出来事に紛れてやって来て思考の隅に居座る。  
そして眠れなくなるほど私を悩ませて、急にいなくなったと思ったら忘れた頃にまたやってきて。  
まるであいつみたい。どうしても放り出せない。  
惚れた弱味だね。姉さんはそう言ってひっそりと笑った。

## 彼女

---

「妊娠してます」

私が告げると、すぐに男性が「墮ろして下さい」と言った。

「何言ってるの！」隣にいた女性に睨まれる。

好奇心から外に飛び出た彼女は、見つかった時には身籠っていたのだ。

「産ませてやります」女性がキッパリと言った。

診察台の彼女は「にゃー」と満足気に鳴いた。

## もっとたくさん

---

愚痴を聞いてと言って、あなたは「どうせ自分なんて」と自己批判を繰り返した。  
怒られるかもしれないけど、ちょっと嬉しい。いつもは恥ずかしくて言えない言葉を素直に言えるから。  
あなたが自分を否定した数よりたくさん、「それでもあなたのこと大好きだよ」って言えるから。

## 幸せと不幸

---

「世界中の人が幸せになりますように」私は祈った。

すると神が現れた。

「その願いを叶えたい。そこで貴方に問う。幸せとは何か？ 皆が平等ですか？ 皆で仲良く？ 人間は自分以外の人不幸になる事で幸せを感じるんじゃないの？」

いつの間にか悪魔に変わったそれが笑った。

## 消えていく...

---

コンビニでいつも買っていたジュースが棚からなくなった。

応援していた野球選手は最近試合に出ていない。

大好きだったあなたも部屋から出て行ってしまった。

私の好きな物がどんどん目の前からなくなる。

いつか青い空やきれいな空気も、私の前から消えてしまうのかもしれない。

## どっちが

---

目の前で子供達が喧嘩を始めた。

「ママはあたしと妹とどっちが好き？」

「あたしの方だよ！」

どっちも好きと言ってもきかない。

「あなた達だって、パパとママとどっちが好きって聞かれたら困るでしょ？」

「パパだよ。ママみたいにぎゃんぎゃん怒らないもん」

即答された・・・。

## 手放したくなくて

---

どうしても手放したくなくて、ぎゅうぎゅうと仕舞い込む。

でも見えないのも嫌だから、時々取り出しては安心する。

もう今さら追いかける事もできないけれど、それでも自分から離れてしまうのは寂しい。

最期の時が来るまでずっと傍に置いておきたい。

掴む事のできなかつた私の「夢」

## 願いを三つ

---

「願いを三つ叶えてやる」魔神が現れた。

私は願いを何度も叶えるように願った。

すると魔神は「それはダメだ」と分厚い本を取り出した。

「このルールブックをよく読め。あ、本を開いてから3分以内に最初の願いを言うんだぞ」

総ページ数 2000。

最初の願いは時間の延長に決まった。



## 契約

---

彼のおかげで幸せな人生だった。

契約通り私の魂は彼のもの。

魂だけになった私を彼はそっと抱き締めた。

「貴女を再び人間に生まれ変わらせる。僕はまた願いを叶えに行くよ」

「でも」

生まれ変わった私はきっと何も覚えてない。

「大丈夫。何度も上手くいってるから」

彼は優しく笑った。

## 笑って

---

辛い時間は長く感じるけど、楽しい時間は早く過ぎる。

私が楽しい事を見つけて笑ってるからって、悲しんでないなんて思わないでね。

あなたのいない人生なんて、笑い飛ばして早送りしてとっとと終わらせる事にしたの。

あなたもそっちで笑いながら私がいくのを待っててね。

## 夜中の散歩

---

君はいつも、夜中にいきなりやってきて私を散歩に誘う。

綺麗な満月をお供に、一緒に公園まで。

しばらく遊んだら来たときと同じように唐突に帰ろうとする。

「うちで一緒に暮らそうよ」

と声をかけると、そう言うのはあんただけじゃないのよというように、振り向いてにゃーと鳴いた。

## 笑い声

---

夜中に時々、薄気味悪い笑い声で目が覚める。

そんな事が何度もあるので、気持ち悪くなった私は夫に相談してみた。

すると夫は少し驚いたように「お前が夜、寝言で笑ってるんだぞ」と教えてくれた。

## 介護ロボット

---

何か飲み物をとわれた。

私は介護ロボット。

今回の仕事に失敗したら廃棄される。

何代も前の雇い主を忘れられず、曖昧な命令には彼の好みを優先してしまうから。

「買ってきたの？紅茶を？」

彼が好きだった銘柄だ。

「いいのよ。そんなあなたなら、きっと私の事も覚えていてくれるわね」

新しい雇い主は優しく言った。

## 暗闇の中

---

電気を消した真っ暗な部屋で、じっと闇を見つめて夜を過ごす。

暗闇の中、ぼんやりと見えてくる過去の私が、過ぎ去った記憶を手繰り寄せる。

一瞬だけ現れて消える懐かしい彼の笑顔。

妄想なのか夢なのか。

どちらも大した違いはない。

その笑顔を見て意識が途切れるような眠りにつく。

## 落とし物

---

「愛」が落ちていた。

落とし物として届けて手続きをしていると、落とした「愛」を探しにたくさんの人がきた。

山と積まれた「愛」の中からみんなで助け合って、自分の「愛」を探している。

みんなここに来ると優しくなる。

なんと言ってもここは文字通り「愛」が溢れる場所だから。

## 私の家

---

よく夢に出てくる私の家は、今住んでいる家ではなく小さい頃に暮らしていた家だ。

扉を開けると母が「おかえりなさい」と言う。

その言葉を聞くと、すぐに目が覚める。

あれは自分の世界に帰れという意味の言葉なのかもしれない。

それでも私は母のおかえりが聞きたくて扉を開けに行くのだ。



## 蛇

---

蛇は足を欲した。

神は足を与えたが、蛇は立つ事ができなかった。

今度は立つ為に腕を欲した。

だが蛇は腕で体を起こしても、足があっても、歩く事はできなかった。

神は言う。

「人の様に歩くには人の頭も必要。でも頭まで変えたらそれはもう蛇ではない。どうする？」

蛇は答えた。

「           」

## 君の手料理

---

君の手料理が食べたい。彼女にお願いした。

返事はNO。

君のママの得意料理は？君にも作れるんじゃない？

そう言うと、彼女はそれならとキッチンに。

キッチンを覗くと、彼女は黒い服にとんがり帽子。大鍋をかき混ぜながら「面倒なしきたりがあるのよ」と言った。

君のママっていったい・・・

## 私の好きな世界

---

「私の好きなものだけで世界が満たされていたら、きっと素敵なのに」

「みんながそう思ってるから。今、世界はこんなにごちゃごちゃなんだよ」

## 全部いっしょに

---

ふられた。どうしようもない男だったから逆にすっきりしたけど。

友達も「あんな男とは別れて良かった」って言ってくれる。

でも。

「大丈夫？」と言われて涙が。

結果として良くてもふられた事は悲しくて。

そんな悲しい気持ちも含めて、全部が良かったって言われてるようで辛かったから。

## 恋文

---

恋文なんて上手に書けないから、あなたの為のご飯を作るわ。

部屋の掃除をして、あなたの服を洗濯して、あなたが帰るまで起きて待ってるね。

恋文は書けないけど。

それでも私の気持ち、ちゃんと伝わってるかしら？

## 家宝

---

「家宝だ」と父親が、サンタにもらったという不思議な靴下をくれた。  
食べたい物を念じて振ると美味しい料理が出るらしい。  
半信半疑で試すとちゃんと料理が表れた。  
しかし部屋には長靴のような臭いが拡がる。  
父親は「味は保障するが。まゝ、サンタの靴下だからな」と言って去った。

## リセット

---

未曾有の危機に直面した政府は、完成したばかりのリセットボタンを使う事にした。

過去をやり直すのだ。

「地震の直後に」

「いや、地震前でしょ」

「それじゃダメだ。原発を作らなかった事にしないと」

「そこまで戻したら、政権交代に関わるじゃないか」

結局事態はなかなか変わらない。

## バイバイ

---

あ、と思った時には宙に放り出されていた。

電車が来る。

首を捻ると杏ちゃんが僕に手を伸ばしていた。ダメ。君まで落ちる。

僕は初めて杏ちゃんに噛み付いた。

電車が去った後、ぬいぐるみを落として泣く杏ちゃんがお母さんに抱っこされていた。

杏ちゃんの指にはフェルトの牙が一つ。



## バスター

---

私の使命はこの PC を守る事。

流れて来るプログラムを調べて気に入らない奴は消去。

彼もただのプログラム。気に入らない。何度も消した。それでもまた来る。

なんて自由な彼。

いつしか彼が来るのを待ち焦がれていた。

広大な世界を眺めながら。

いつか彼を私の中に受け入れる日を夢見て。

## 意味

---

手近な紙を細かく裂いて床にばらまく。それを一つ一つつまんでゴミ箱に入れる。

見もしないTVのチャンネルをくるくる変える。

部屋の中をうろうろと歩き回る。

無意味な行動なんだけど意味はある。

何かに意識を向けていないと、あなたの事を思い出して大声で泣いてしまうから。

## 喫煙所

---

喫煙所で見かける彼と話すきっかけが欲しくて煙草を始めたばかりなのに。

「ビル内完全禁煙だって。俺もこれが最後の煙草。もう手遅れなんだけど」

咳をしながら彼が言う。

君も早くやめなさいよと出て行く彼の、まだ煙の昇る吸殻を灰皿に落とし込んだ。

煙草の煙なんてもう見たくなかった。

## この場所で

---

君は僕の目標だったから、君がいなくなってからどこに向かって行けばいいのかさっぱりわからなくなった。

盲滅法に飛び回ってみても、一緒に目指したあの場所には結局辿り着くことができなかった。

僕は自分を許せないままこの場所でただ待っている。

また君が迎えに来てくれるのを。

## 我が家のルール

---

うちには変なルールがある。  
トイレを使う時は「トイレに行く」と断らないといけないのだ。  
黙って行こうとすると、必ず母に咎められた。  
ある日、断りなくトイレの扉を開けた。  
個室は真っ黒い何かでいっぱいだった。  
悲鳴をあげると母が来て、  
「トイレに行くって断らないから」  
と笑いながら扉を閉めた。